

日蓮大聖人御書全集

うらぼんごしよ

盂蘭盆御書

新版
2022
〜
2027

盂蘭盆御書

こうあんがんねん

弘安元年(78) または同2年(79)の7月13日

どうねん

がつにち

さい

57歳または58歳

さい

じぶぼう うば

ごへんじ

治部殿

祖母御前

返

こと

にちれん

御返事

じぶどののうばごぜんのかえり事

日蓮

うらぼん

もう

そうろう

ほとけ

みでし

なか

もくれんそんじや

盂蘭盆と申し候ことは、仏の御弟子の中に、目連尊者

もう

しやりほつ

並

ち えだいいち

じんずうだいいち

もう

と申して、舍利弗にならびて智慧第一・神通第一と申して、

しゆみせん

にちがつ

並

だいおう

そう

しん

須弥山に日月のならび、大王に左右の臣のごとくにおわせ

ひと

ひと

ちち

きつせんしし

もう

はは

しやうだいによ

し人なり。この人の父をば吉占師子と申し、母をば青提女

もう はは けんどん とが がきどう お そうら

と申す。その母の慳貪の科によつて餓鬼道に堕ちて候いし

もくれん そんじや 救 たも こと起 そうらう

を、目連尊者のすくい給うより事おこりて候。

いんねん はは がきどう お 歎 そうら

その因縁は、母は餓鬼道に堕ちてなげき候いけれども、

もくれん ぼんぷ し ようしよう げどう いえ い

目連は凡夫なれば知ることなし。幼少にして外道の家に入

し 韋だ じゆうはちだいきよう もう げどう いっさいきよう 習 尽

り、四い陀・十八大経と申す外道の一切経をならいつく

はは しょうじよ 知 のち じゆうさん

せども、いまだその母の生処を知らず。その後、十三の

年 しゃりほつ しゃかぶつ 参 みでし

とし、舍利弗とともに釈迦仏にまいりて御弟子となり、見惑

断 しゃか しょうにん しゆわく だん あらかん

をだんじて初果の聖人となり、修惑を断じて阿羅漢となり

さんみよう 具 ろくつう 得 たま てんげん 開 さんぜん

て、三明をそなえ六通をえ給えり。天眼をひらいて三千

だいせんせかい みようきよう

影

ご 覧

だいじ

大千世界を明鏡のかげのごとく御らんありしかば、大地

見 通

さんあくどう

み

こおり

した

そうろうお

あさひ

向

をみとおし三悪道を見ること、氷の下に候魚を朝日にむ

われ

透

見

なか

がきどう

もう

かいて我らがとおしみるがごとし。その中に餓鬼道と申す

所

わ

はは

飲

く

食うことなし。

かわ

ところにて我が母あり。のむことなし、食うことなし。皮は

金

鳥

筆

ほね

丸

いし

並

きんちようをむしれるがごとく、骨はまるき石をならべた

こうべ

毬

くび

糸

はら

るがごとし。頭はまりのごとく、頸はいとのごとし。腹は

たいかい

くち

張

て

あ

もの

乞

かたち

飢

大海のごとし。口をはり手を合わせて物をこえる形は、う

蛭

ひと

香

嗅

せんしやう

こ

見

泣

えたるひるの人のかをかあげるがごとし。先生の子をみてな

姿

飢

形

譬

およ

かんとするすがた、うえたるかたち、たとえをとるに及ば

悲
ず。いかんがかなしかりけん。

ほつしようじ

しゆぎよう

しゆんかん

硫黄

しま

流

法勝寺の執行・俊寛が、いおうの島にながされて、

裸

髪

頸着

打負

瘦

衰

かい

はだかにて、かみくびつきにうちおい、やせおとろえて海

辺休

藻屑

取

腰

卷

うお

ひと

見

へんにやすらいて、もくずをとりにこしにまき、魚を一つみ

みぎて

くち嚙

ときもと使

童

つけて右の手にとり、口にかみける時、本つかいしわらわの

訪行

みとき

もくれんそんじゃ

ははみ

たずねゆきて見し時と、目連尊者が母を見しと、いずれか

疎

今少

悲

勝

おろかなるべき。かれはいますこしかなしさはまさりけん。

もくれんそんじゃ

悲

だいじんずう

現

たま

目連尊者は、あまりのかなしさに大神通をげんじ給い、

飯進

はは喜

みぎて

飯

はんをまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははん

握ひだりてははん飯をか隠くして口くちにおし入押れ給いい

しかば、いかんがしたりけん、はん飯変へんじて火ひとなり、やが

てもえあがり、とうしびを集あつめて火ひをつけたるがごとく、

ばともえあがり、母ははの身みのごごことやけ候焼いしを目連見

給たまいて、あまりあわてさわぎ、大神通だいじんずうを現げんじて大おおいなる水みずを

かけ候掛いしかば、その水みずたきぎとなりて、いよいよ母ははの身み

のやけ候焼いしことこそ、あわれには候哀いしか。そうら

その時とき、目連もくれん、みずから自の神通じんずうかなわざりしかば、はしり走

かえり、須臾しゆゆに帰仏ほとけに参まいりて歎なげき申もうせしようは、様「我が身わみ

げどう いえ う

そうら

ほとけ

みでし

は外道の家に生まれて候いしが、ほとけ 仏の御弟子になりて

あらかん み 得 さんがい しょう 離 さんみよろくつう ちかん

阿羅漢の身をえて、三界の生をはなれ、三明六通の羅漢と

そうら

はは

だいく

救

そうら

はなりて候えども、乳母の大苦をすくわんとし候に、か

だいく 遭

そうら

こころ憂

歎

そうら

えりて大苦にあわせて候は心うし」となげき候いしか

ほとけと

のたま

なんじ

はは

罪

深

なんじいちにん

ちから

ば、仏説いて云わく「汝が母はつみふかし。汝一人が力

およ

たにん

てんじん

ちじん

じやま

げどう

及ぶべからず。また多人なりとも、天神・地神・邪魔・外道・

どうし してんのう たいしやく ぼんのう ちから およ しちがつじゅうごにち

道士・四天王・帝釈・梵王の力も及ぶべからず。七月十五日

じっぼう

しょうそう

集

ひやくみ

飲

食

調

はは

に十方の聖僧をあつめて、百味おんじきととのえて、母の

苦

救

うんぬん

もくれん

ほとけ

おお

おこな

くはすくうべし」と云々。目連、仏の仰せのごとく行い

しかば、その母は餓鬼道一劫の苦を脱れ給いきと、盂蘭盆経

はは が きどういつこう く のが たま うらぼんぎよう

と申す経にとかれて候。それによつて、滅後末代の人々

もう きよう 説 そうろう めつごまつだい ひとびと

は七月十五日にこの法を行ひ候なり。これは常のごとし。

しちがつじゅうごにち ほう おこな そうろう つね

日蓮案じて云わく、目連尊者と申せし人は、十界の中に

にちれんあん い もくれんそんじゃ もう ひと じっかい なか

声聞道の人、二百五十戒をかたく持つこと石のごとし。

しようもんどう ひと にひやくごじっかい 堅 たも いし

三千の威儀を備えてかけざること十五夜の月のごとし。

さんぜん いぎ そな 欠 じゅうごや つき

智慧は日ににたり、神通は須弥山を十四そうまき、大山を

ちえ ひ 似 じんずう しゆみせん じゅうし 巾 巻 たいざん

うごかせし人ぞかし。かかる聖人だにも重報の乳母の恩

動 ひと しようにん じゅうほう はは おん

ほうじがたし。あまつさえ、ほうぜんとせしかば、大苦をま

報 報 だいく 増

たま

そうとう

にひやくごじっかい

な

じ

し給いき。いまの僧等の、一二百五十戒は名ばかりにて、事を

戒

寄

ひと

誑

いちぶん

じんずう

たいせき

てん

かいによせて人をたぼらかし、一分の神通もなし。大石の天

昇

ちえ

うし

類

ひつじ

異

にのぼらんとせんがごとし。智慧は牛にるいし羊にことな

せんまんにん

集

ふぼ

いっく

救

らず。たとい千万人をあつめたりとも、父母の一苦すくう

べしや。

詮

せんずるところは、目連尊者が乳母の苦をすくわざりし

もくれんそんじゃ

はは

く

救

しょうじょう

ほう

しん

にひやくごじっかい

もう

じさい

ことは、小乗の法を信じて二百五十戒と申す持斎にてあ

故

じょうみやうきよう

もう

きよう

じょうみやう

りしゆえぞかし。されば、浄名経と申す経には、浄名

こじ

もう

おとこ

もくれんぼう

責

い

なんじ

くよう

さん

居士と申す男、目連房をせめて云わく「汝を供養せば、三

あくどう お うんぬん もん こころ にひやくごじっかい 尊 もくれん

悪道に墮つ」云々。文の心は、二百五十戒のとうとき目連

そんじゃ 供 養 ひと さんあくどう お うんぬん

尊者をくようせん人は、三悪道に墮つべしと云々。これま

もくれんいちにん 聞 耳 っさい しょうもん ないし

た、ただ目連一人がきくみみにはあらず。一切の声聞、乃至、

まつだい じさいとう じようみようきよう もう

末代の持斎等がきくみみなり。この浄名経と申すは、

ほけきよう おん すうじゆうばん まつ ろうじゆう そうろう

法華経の御ためには数十番の末の郎徒にて候。

せん もくれんそんじゃ じしん ほとけ 成

詮ずるところは、目連尊者が自身のいまだ仏にならざる

故 じしんほとけ ふぼ 救

ゆえぞかし。自身仏にならずしては、父母をだにもすくい

況 たにん

がたし。いおうや他人をや。

もくれんそんじゃ もう ひと ほけきよう もう きよう

しかるに、目連尊者と申す人は、法華経と申す経にて、

しょうじき

ほうべん

す

しょうじょう

にひやくごじっかい

「正直に方便を捨つ」とて、小乗の二百五十戒立ち

所 投 捨

なんみようほうれんげきよう

もう

どころになげすてて南無妙法蓮華経と申せしかば、やがて

ほとけ 成

みようごう

たまらばつせんだんこうぶつ

もう

とき

仏になりて、名号をば多摩羅跋梅檀香仏と申す。この時こ

ふぼ ほとけ

たま

ゆえ

ほげきよう

い

わ ねが

そ、父母も仏になり給え。故に、法華経に云わく「我が願

すで まん

しゆ のぞ

た

うんぬん

もくれん

しき

いは既に満じて、衆の望みもまた足りなん」云々。目連が色

しん ふぼ

いたい

もくれん

しきしんほとけ

ふぼ

み

心は父母の遺体なり。目連が色心仏になりしかば、父母の身

ほとけ

もまた仏になりぬ。

れい

にほんこくはちじゅういちだい

あんとくてんのう

もう

おう

ぎよう

例せば、日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に、

へいし

たいししよう

あきのかみきよもり

もう

ひと

たびたび

かつせん

平氏の大將・安芸守清盛と申せし人おわしき。度々の合戦

こくてき

滅

かみだいじようだいじん

しんい

極

とうぎん

に国敵をほろぼして、上太政大臣まで臣位をきわめ、当今

孫

いちもん

うんかくげつけい

列

にほんろくじゅうろく

はまごとなり、一門は雲客月卿につらなり、日本六十六

こく しまふた

たなごころ

うち

搔

握

そうら

ひと

したが

国・島二つを掌の内にかいにぎりて候いしが、人を順

おおかせ

そうもく

靡

そうら

うること大風の草木をなびかしたるようにて候いしほど

こころ

傲

み上

けつく

しんぶつ

侮

じにん

に、心おごり身あがり、結句は神仏をあなずりて、神人と

しよそう

て

握

さんそう

しちじ

しよそう

諸僧を手ににぎらんとせしほどに、山僧と七寺との諸僧の

敵

けつく

い

じしようしねんじゆうにがつにじゆうにち

かたきとなりて、結句は去ぬる治承四年十二月二十二日に、

しちじ

うち

とうだいじ

こうふくじ

りようじ

や

払

七寺の内、東大寺・興福寺の両寺を焼きはらいてありしか

だいじゆうざい

にゆうどう

み

返

年

ようわ

ば、その大重罪、入道の身にかかりて、かえるとし養和

がんねんうるうにがつよつか み 炭 元年閏二月四日、身はすみのごとく血は火のごとく、すみ 炭

熾 けつく ほのおみ い 熱 死 のおこれるがようにて、結句は炎身より出でてあつちじに

し だいいじゅうざい になんむなもり 譲 に死ににき。その大重罪をば二男宗盛にゆずりしかば、

さいかい しず 見 とうてん う い 西海に沈むとみえしかども東天に浮かび出でて、右大将頼

とも おんまえ なわ 付 引 据 そうら さんなんとももり うみ 朝の御前に縄をつけてひきすえて候いき。三男知盛は、海

い うお ふん しなんしげひら み なわ に入つて魚の糞となりぬ。四男重衡は、その身に縄をつけ

きよう 鎌 倉 ひ 返 けつく 奈 良 しちだいじ 渡 て京・かまくらを引きかえし、結句なら七大寺にわたされ

じゅうまんにん だいいしゅとう われ ほとけ 敵 て、十万人の大衆等、我らが仏のかたきなりとて一刀ず

つぎざみぬ。 刻

つぎざみぬ。

あく なか だいあく わ み く 受
悪の中の大悪は、我が身にその苦をうくるのみならず、子
まご すえしちだい 懸 そうら ぜん なか だいぜん
と孫と末七代までもかかり候いけるなり。善の中の大善も
またまたかくのごとし。

もくれんそんじや ほけきょう しん だいぜん わ みほとけ
目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏に
成 ふぼ ほとけ たも かみしちだい しもしちだい かみ

なるのみならず、父母、仏になり給う。上七代・下七代、上

むりようしよう しもむりようしよう ふぼとう ぞんがい ほとけ たも ないし
無量生・下無量生の父母等、存外に仏となり給う。乃至

だいだい しそく ふさい しよじゆう だんな むりよう しゅじよう さんあくどう 離
代々の子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生、三悪道をはな

るのみならず、皆、初住・妙覚の仏となりぬ。故に、
みな しよじゆう みようかく ほとけ ゆえ

ほけきょう だいさん い ねが くどく
法華経の第三に云わく「願わくはこの功德をもつて、あま

ねく一切に及ぼし、我らと衆生と、皆共に仏道を成ぜん」
うんぬん
云々。

されば、これらをもつて思うに、貴女は治部殿と申す孫を

僧にてもち給えり。この僧は無戒なり、無智なり。

二百五十戒、一戒も持つことなし。三千の威儀、一つも持た

ず、智慧は牛馬にるいし、威儀は猿猴ににて候えども、あお

ぐところは釈迦仏、信ずる法は法華経なり。例せば、蛇の珠

をにぎり、竜の舍利を戴けるがごとし。藤は松にかかり

て千尋をよじ、鶴は羽を持って万里をかける。これは自身の

ちから

じぶぼう

わみふじ

力にはあらず。治部房もまたかくのごとし。我が身は藤の

ほけきよう まつ 懸 みようかく やま

登

ごとくなれども、法華経の松にかかりて妙覚の山にもものぼ

いちじよう はね 侍 じゃつこう そら 翔

りなん。一乗の羽をたのみて寂光の空をもかけりぬべし。

はね ふぼ そふうば ないししちだい まつ

この羽をもつて、父母・祖父祖母、乃至七代の末までも

訪 そろう おん 宝 持 たま

とぶらうべき僧なり。あわれ、いみじき御たからはもたせ給

によにん

いておわします女人かな。

か りゆうによ たま 捧 ほとけ 成 たも によにん まご

彼の竜女は珠をささげて仏となり給う。この女人は孫

ほけきよう ぎようじや 導 たも ことごと

を法華経の行者となしてみちびかれさせ給うべし。事々

恩 々 そろう 詳 もつ もつ

そうそうにて候えば、くわしくは申さず。またまた申すべ

そろうろう きょうきょうきんげん

く候。恐々謹言。

しちがつじゅうさんにち

七月十三日

にちれん

日蓮

かおう

花押

じぶどのの祖母御前ごへんじ

治部殿うばごぜん御返事

こめひとたわら

焼

米

瓜

茄

子

とう

ぶつぜん

捧

麩牙一俵・やいごめ・うり・なすび等、仏前にささげ

もう

あ

そろうら

お

て申し上げ候いたわんぬ。